

千草鉄のふるさと

千草山城

調査第10集

平成22年4月

北播磨城郭研究会

目 次

は じ め に	1
位 置	2
特 徴	4
歴 史 的 背 景	6
城 郭 の 構 造	9
「防衛部分」「居住部分」「居館部分」	
宇野氏の研究 (No - 2)	12
図 版	14

はじめに

宍粟市千種町には、かつて「千草城」があった。

しかし その姿は、今日まであまり明確になっておらず、伝承があつたのみである。

昭和57年発行の兵庫県教育委員会『兵庫県の中世城館・莊園遺跡』には「石原城」として記載されているが、城郭として正確に把握されているとは言い難いものである。

今回 その実像を求めて調査研究をおこなってみた。

実際に調査を行なってみると、戦国時代の播磨「境目の城」として立派な城郭である。特に、この地区は「千種鉄」の産地として、日本刀の材料として重要視されていた。

城郭も、この事柄を考慮して築かれており、実際の現地調査にもこの事を十分に考えて行なわねばならない事は当然である。

各種の文献にも「千種で作刀」とあり、この地で刀作りが行なわれていた事も確かである、この城でも、そのことが明確になればより好ましい事である。

城郭の詳細について、以降に各項目の解説を行なうが、これが緒論となって今後の研究の進むことを期待して提稿するものである。

先輩諸賢の御指摘をお願い申し上げます。



北西方面から見た「千草城」

位 置

兵庫県の北西部、千種川の上流部に位置する宍粟市千種町黒土地区河井に存在する。

千種町は、『播磨風土記』にも記されているように古代より鉄を作り、中世以降は、特に備前の刀匠たちに珍重されて数々の名刀を残した「千草鉄」のふるさとである。

国道29号線の斎木口交差点（宍粟市波賀町）より岡山県に向かう国道429号線を10km入った千草町市街地の南に聳える半独立状の峻険な山体（標高390m）に築かれており現在は城宮が祀れている、市街地を眼下にして美作方面への分岐路も直下にあり、千種川沿いの谷筋を把握する要衝の地点である。

この位置関係は「波賀市街地と古城山」と同じ様子である。

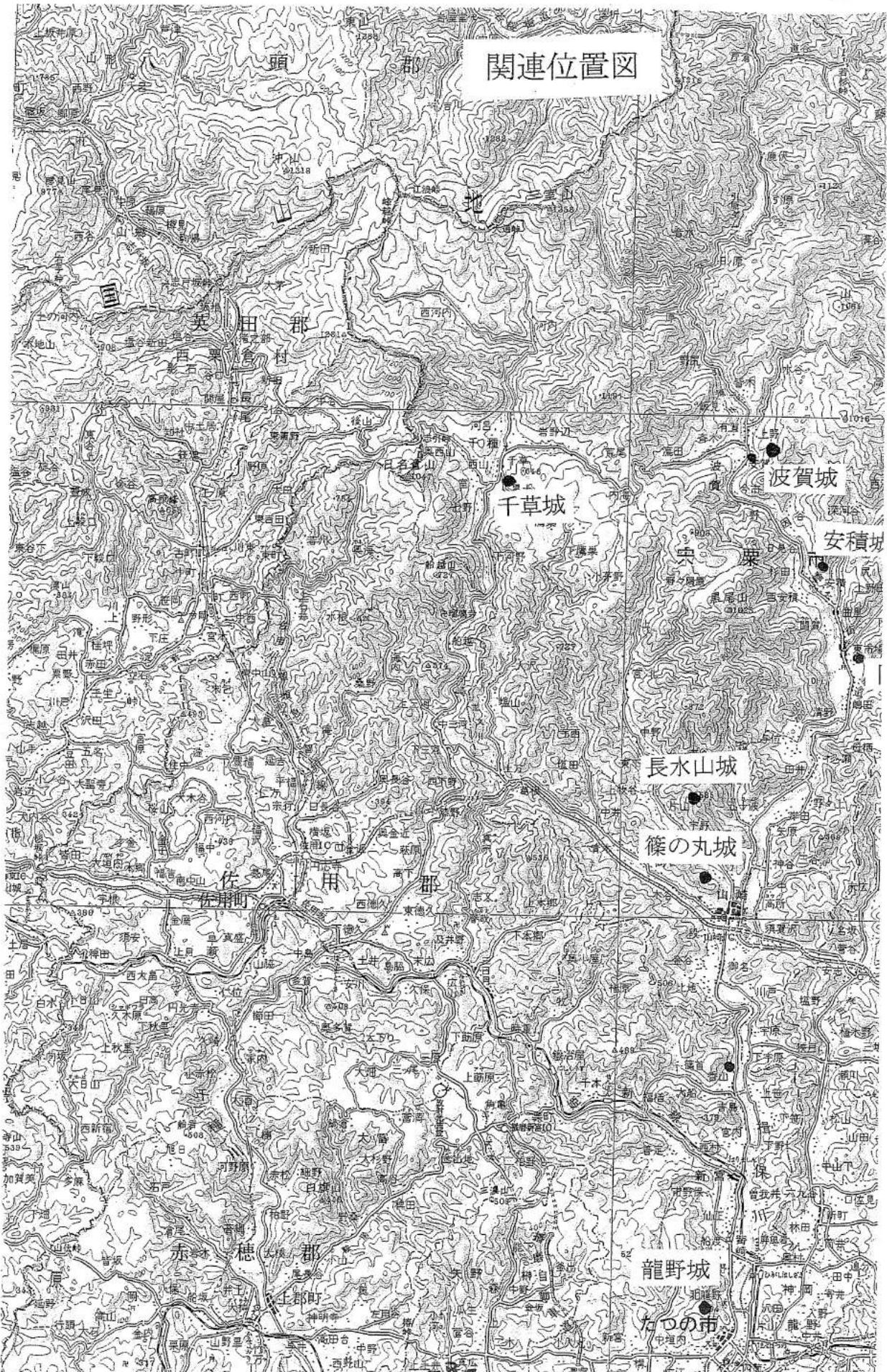
また その位置は、播磨国のあるが、歴史的に見ると「境目の城」として重要な位置を占めており、それなりの人物がその任に当たっていたものと予想される。

特に時期としては、南北朝期と戦国時代に当たり、構造にその跡を見る事ができる。

歴史的には、別の項で述べることにするが、この地域の緊張を感じる事ができる。

荘園の時代は「佐用荘」に含まれていた事もあるが、宍粟郡部周辺の支配者であった「宇野氏」の勢力下にあり、その関連を見る事ができるものである。





特 徴

この城の特徴は、千種地区の城と言うよりも「播磨の城」として機能する役目を持っており、その要素を構造に見ることが出来る。

城郭は、その地区を経済的に支配し、侵入する勢力から防御する事を最大の目的としていることは言うまでもない。

それでは「千草城」が、どのような特徴を持っているのかを解説する。

1、この地区を支配する「位置」を占めている。

千草地区は、波賀から美作地方に抜ける街道（国道429号）と因幡地方に抜ける街道（国道373号）の分岐点にあり、「千草鉄」の産地である町屋街の南側の重要な地点に存在している。

2、「山城部分」に比べて「屋敷部分」が大きい。

山城の部分も、「掘切」や「削平地」を巧みに配置しており、戦国時代の特長である「掘底道」も取り入れられて防備を固めている。

屋敷部分も、性格の異なる「二つの屋敷」があり、この城のもつ特殊性を示している。

3、支配の二重性を示している。

二つの屋敷を比較すると、この城の支配が複層になっている事が考えられる。上層支配は、永正18年まで赤松家、それ以降は宇野家であり、一時的に山名氏にも属していた。

下層支配は、赤松時代が大河原氏、その後は石原氏であった。

4、防御の手法として「やり過ごし」と「急坂」が使われている。

城郭の重要な場所には、この組み合わせの防御構造で防備を固めている。

これは、後の「袖折れ虎口」に至る構造である。

明確なのは、二箇所に認められる。

5、「水」を大切にしている。

この城の「水場」は、三箇所に存在しており、それぞれの用途に差がある。

イ、山城の本郭にあり、篠城に備えたもの。

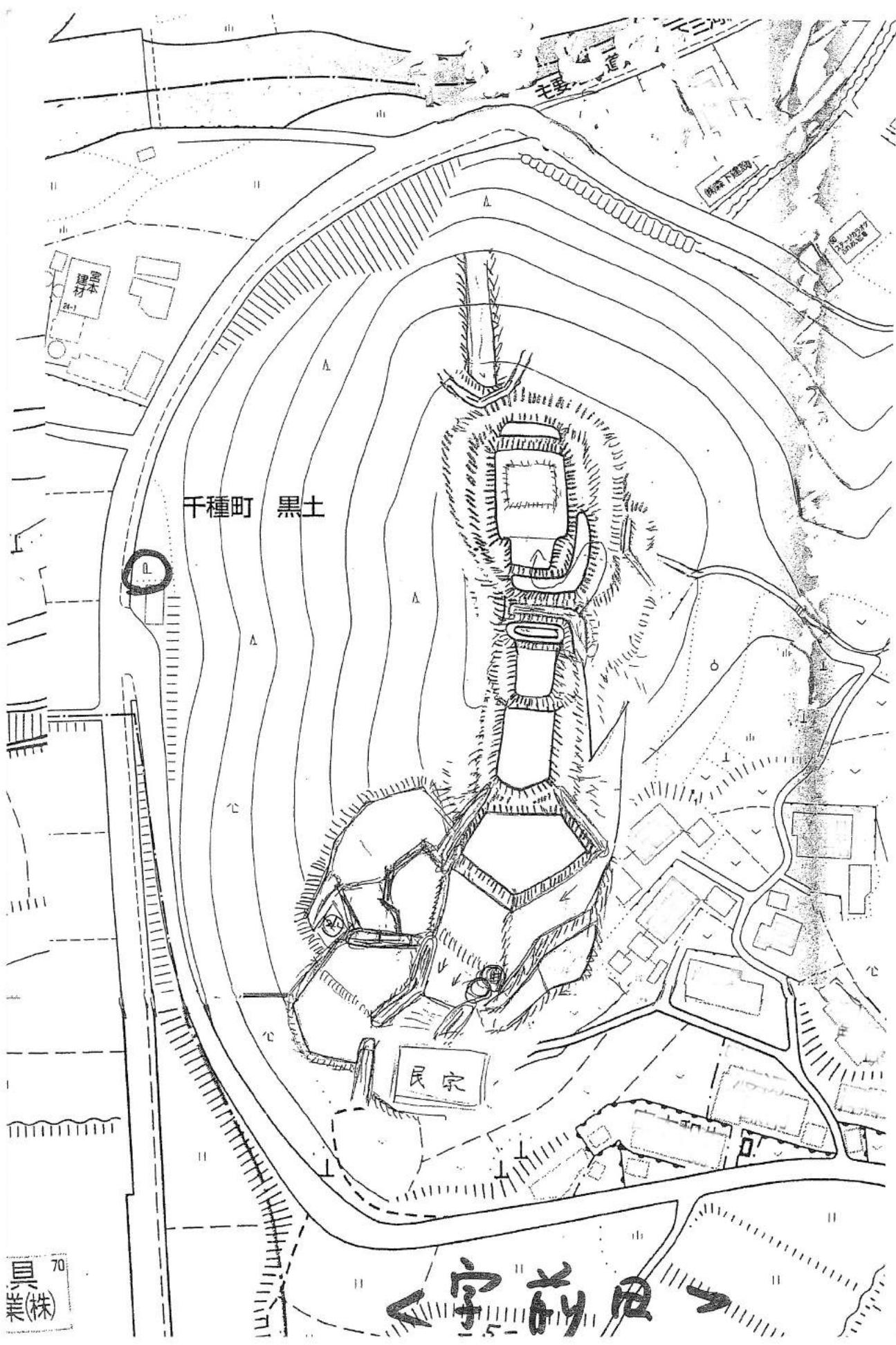
ロ、大手口の脇にあり、上の屋敷に使われるもの。

ハ、日常の居住に使われるもので、かなり大きなものである。

6、この城の存在している山体は、「マサ土」なので崩れやすい。

この山は、崩れやすく、狸や狐の巣穴によって各所に穴があり、早急な対策が必要であると考えられる。しかし 水には有効である。

これらの事柄を検討すると、この城の持っている改修と堅固さを知る事ができる。



歴史的背景

この城郭の歴史を眺めてみると、この地域の支配関係を検証することになる。

1、鎌倉時代

この地は、宍粟郡内ではありながら「佐用荘」に含まれており、建長2年（1250）11月、九条道家の譲り状に「播磨国千草村<本家右大臣>」とあり、東福寺の塔頭である光明峰寺に寄進されて、それ以降、同寺領として伝えられた。

2、室町時代

元弘3年（1333）7月24日「佐用荘」は後醍醐天皇より、九条道教に伝領が認められている。（九条家文書）

『太平記』によれば、南北朝の時代、山名軍の美作からの侵入に対して、千草城をはじめ多くの城砦がこの地域に築かれており、その内でも「中心的な城」であった。

しかし 位置としては「この場所」と考えられるが、縄張りは不明である。

前期赤松氏の時代には、西播磨守護代であった宇野氏の下で、中村氏がその守備任務に当たっていたものと考えられ、「大河原氏」はその一族であった。

* 「嘉吉の乱」に際しては、防衛地点になっていなかったと考えられる。

3、山名氏の時代、

山名氏は、3回（嘉吉年間・文明年間・大永年間）に亘り、播磨の国を支配した。

この時、守護・守護代・郡代などは家臣が任命されているが、現地の代官はその土地の人物か、赤松家の庶流家の人物である。

包里（かねさと）四郎右衛門もこの様な人物ではないかと考えられる。

4、後期赤松時代

文明年間から天文19年までは、赤松氏の代官として「大河原氏」が担当していた。

陰涼軒日録、延徳4年（1492）4月16日条に「中村・皆木・大河原 兄弟3人也」そして、明応2年（1493）5月23日条にも「中村・皆木・大河原者三人之流也、皆木者号中村、大河原者不号中村」とあり、中村氏の一族であったが大河原と名乗っている。

しかし 天文19年（1550）から「石原氏」に変わったとする。

5、宇野氏の時代

天文年間になると、出雲の「尼子氏」が勢力を拡大して播磨の国にも進出してきた。

逆に赤松氏の勢力が低下して、家臣が自立の道を進めてきた。

天文21年（1552）4月2日、室町幕府は尼子晴久に“因幡・伯耆・備前・美作・備後・備中”6カ国の守護職を与えた。

この頃 備前の浦上政宗が、赤松晴政に離反して尼子晴久と結ぶ。

そして この動きは、播磨にも及び、この地域を管轄していた宇野政頼も赤松晴政と分かれて尼子氏と結ぶ事となる。

この時期に「石原氏」がこここの代官として「千草城など」を守り、改修を行なった。

これが現在残されている「千草城」である。

(参考項目)

1、近世地誌にみる千草城

各地の城郭を記した主な地誌には 1、播磨鑑（平野庸脩・宝暦12年）
2、赤松家播備作城記（剣持長視・元禄時代）
3、播陽古城記（天川友親・宝暦10年）がある。

この内 千草城は「赤松家播備作城記」のみに記されているが、他の2誌にはない。
他に昭和7年の「宍粟郡古城記」があるが、内容について趣が異なると感じる。

「赤松家播備作城記」には次の様に記されている。

千草城 宍粟郡千草郷

包里四郎右衛門 居城、文明17年依逆心、大河原九郎二郎討之 大河原九郎二郎 自文明
17年居城 同因幡守時之 同子也相続、采地ハ宍粟郡内本領者安賀村同神戸郷三分一、後千草
郷半分 同備中守之清 同子也相続 同与市直清 同子也、為中村土佐守宗秀敗北也 石原
四郎兵衛尉 自天文19年居城、天正8年5月落城

これらの事柄は、前記の「歴史的背景」の意味とも合う所が感じられる。

2、天分年間の美作騒乱

『歴史と神戸246号』に畠和良氏の論文「天文・弘治内乱と赤松晴政」があり、
それに依れば、播磨守護赤松晴政は 宇野氏をはじめ多くの有力家臣と対立してお
り、美作地域などには侵入してきた尼子氏と連携する者も現れて、美作国出兵をし
ている事も見受けられる。

従って 播磨の端ではあるが緊張があったと考えられる。

3、文献にみる事柄

平成17年、兵庫県上月町発行の『上月合戦』の史料編P-72に

新免宗貫感状写（古町村春名氏所蔵文書）

今度草刈西河内表江一城取出処、則此方より飛ヶ谷表へ人数差出候処、
及一戦数刻相戦衝崩大利候処、高名無比類候必恩賞可相計候 恐々謹言

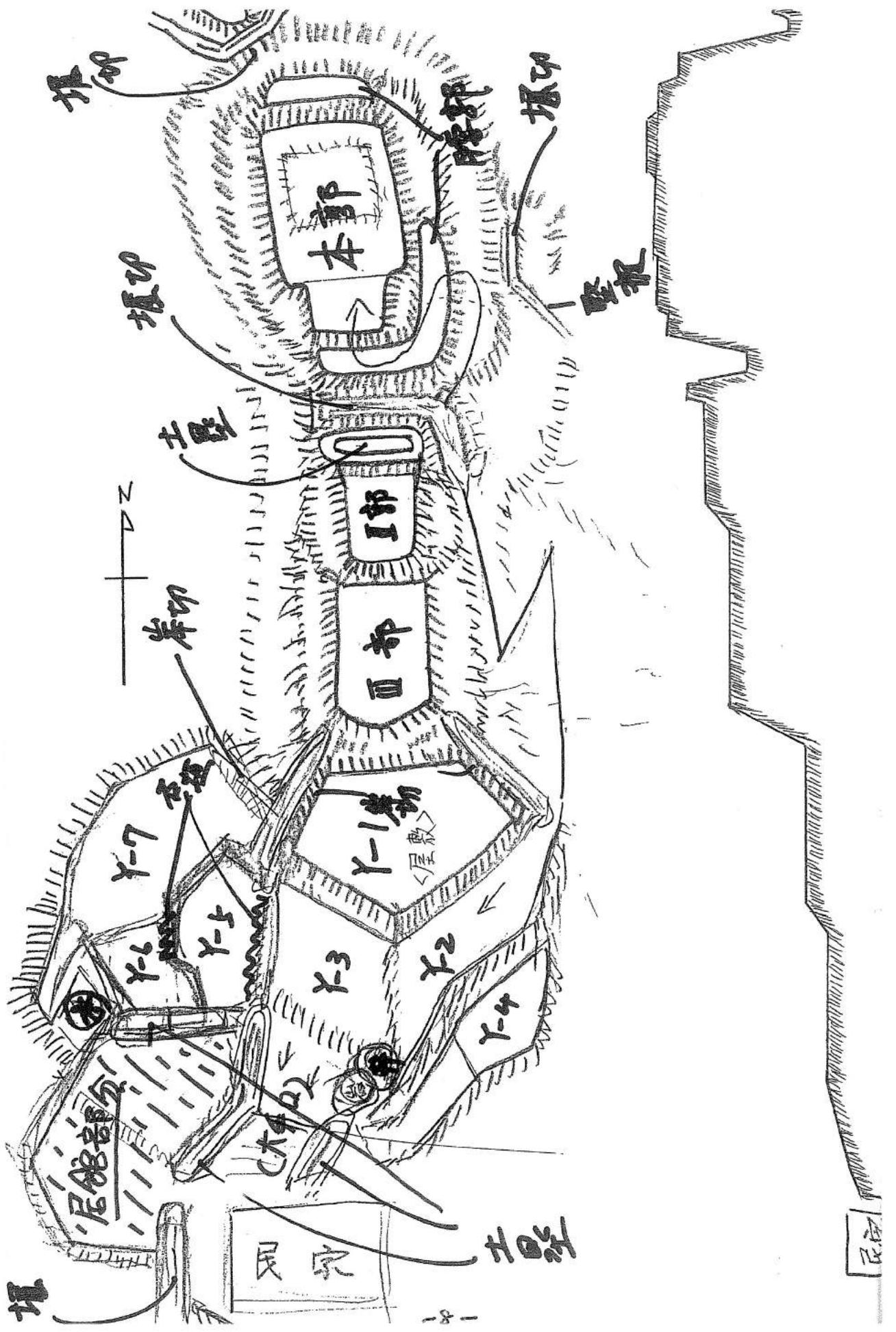
天正六年八月朔日

宗貫

春名三之丞殿

が掲載されている。

西河内は、千種町西河内であり、飛ヶ谷は、西粟倉村長尾引谷とされている。
これからみれば、この周辺がかなりの緊張をしていた事が窺える。



城郭の構造

この山城は、城郭としての「防御部分」と屋形としての「居住部分」に分けられる。明確に分離されているわけではないが、構造として次の様に見る事ができる。

「防御部分」

右の図において「本郭」「腰郭」「Ⅱ郭」「Ⅲ郭」「堀切」などである。

1、本 郭

標高 390m の山頂にあり、現在は「城宮」として数社が祭祀されている。

現在の広場は南北 30m・東西 20m であるが、元は「南北 17m・東西 13m」の方形広場で南側に「南北 9m・東西 10m」の突起部があり、石積みであった。

従って 本郭には南から入る構造であったと考えられる。

広場の周辺部には、樅の大木が聳えている。

2、腰 郭

本郭の東側南半分から南側にかけて巾 3m の L 形腰郭があり、北側にも巾 3m の腰郭が設置されている。何れも比高は 1.5m である。

東南の腰郭は、登城側からに備え、北側の腰郭は、北方面からに備えている。

3、Ⅱ 郭

この郭と本郭側との間には 堀底道を伴った巾 3m の L 形堀切がある。

郭は平坦部「南北 9m・東西 6m」で、堀切側には「巾 2m 高 2m・長さ 6m」の土塁が設けられている。本郭との比高は 12m を計る
谷を登る敵に対しての守備を目的にしている。

4、Ⅲ 郭

この郭は「南北 16m・東西 8m」の平坦な郭で、南側が尖っておってⅡ郭との比高が 3m を計る。

谷を登る敵に対して守備を目的にしている。

5、堀 切

イ、北側の堀切

この山城の北側から西側にかけては 守備施設がない。

山体北側の尾根筋を土塁状に見立てて、上端に巾 2m で掘り切っている。

その両端は「堅掘」として下に落としている。

その上 本郭の北腰郭との組み合わせで、守備の完全性を喫している。

ロ、南側の堀切

この「堀切」が、この山城の特徴を示している。

Ⅱ郭に沿って逆 L 形に存在しており、谷からの登城道から堀切先端に入り「堀底道」として進む。コーナーを曲がって直進すると西の崖より落ちる。本郭に行くには、角を東に逆に登らねばならない様になっている。

堀巾は 3m で「やり過ごし」のトリックであり、防御の重要な場所である。

本郭側の崖には何段かの「石積み」が見られ、西端にも「石積み」がある。

現在は、地質上から崩れが多い。

ハ、東側の堀切

この堀切は、現在の参道の灯籠がある位置で、東側からの守備を図り、この堀切の南端から「堅掘」が下がって、山腹の回り込みを防ぐ構造である。

規模としては、巾 2m で長さ 5m である。

「居住部分」

右の図において「Y-1」から「Y-7」及び「土壘」「水場」などである。

1、Y-1

この山城の「主たる居住郭」で「上部の人物を迎える屋形」が設けられていたと考えられる。位置的にはⅢ郭の南下にあって大きな岸切と尖った地形になった「南北 18m・東西 28m」の変形削平地である。

他の郭を見下ろす様に存在しており、その性格を知る事ができる。

2、Y-2

この郭は、大手の登城路の一部で、全体に登り勾配で、入口 15m・出口 6m 途中に屈曲のある変形地形であり、その先端は崖下に落ちる構造でこの郭の守備能力に期待している。従って「防御の部分」に属するものもある。この入口部分には、直径 3 m・高さ 4m の大きな岩がある。

3、Y-3

大手郭であって、下部は左右に土壘を持つ大規模なものであり、正面に 3m の比高をもつて「Y-1」に対している。

西側の「Y-5」とは接しているが、ここと虎口があつたか定かではない。

「Y-1」から「Y-4」までと「Y-5」から「Y-7」までの性格が異なっていると考えている。

4、Y-4

この郭は、守備専用の郭で、上の郭から落ちてきた敵を殲滅するものである。

5、Y-5・Y-6・Y-7

これら 3ヶ所の郭については「大手口」の下（比高 3m）に存在しており、その性格の理解に悩むところではあるが、来城した「上部の人物」について来た番衆の控場所と城の番衆の居住区と考えている。

「Y-7」の西隅に大規模な二段の「水場」があり、生活に関する事柄が予想される。また この郭には石積みが多くみられる。

6、土 壁

大手口の左右には、大規模な土壘が築かれている。

また、西の土壘は、途中から曲がっており、上記の 3 郭との間にも「目隠様」の土壘も築かれている。何れも「高さ 3m」の本格的な土壘である。

7、水 場

「Y-7」にある水場は「南北 10m・東西 5m」で二段になった本格的な物で「多くの貯い」が可能であろうが、現在は竹藪となって埋まっている。

大手口脇の大きな岩の傍にも「井戸様」の跡がある。

この山城は「真砂土」で成り立っており、山裾には多くの井戸がある。

「居館部分」

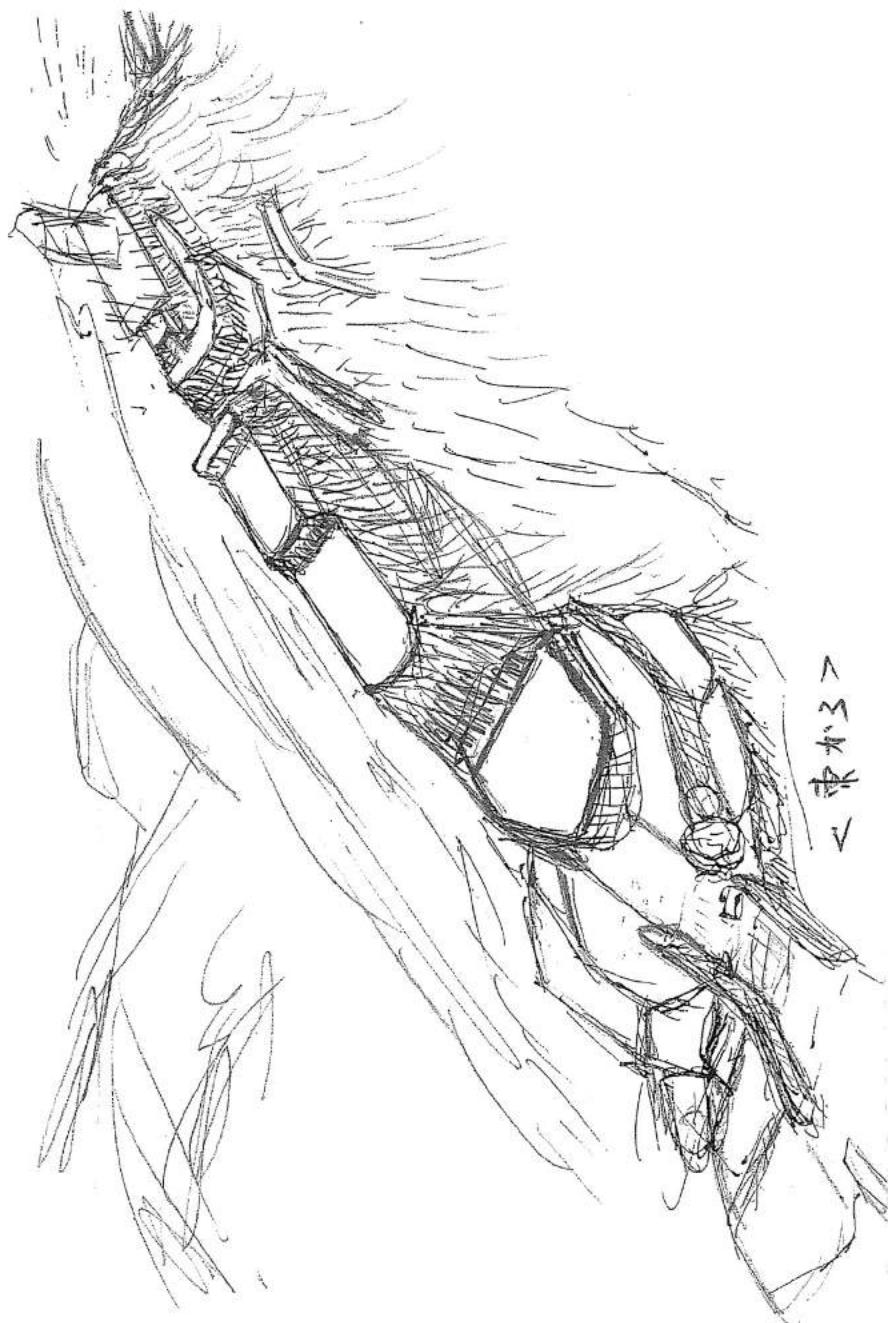
右の図で「民家」に続く「居館部分」は、この城を預かる人物の居住場所であろう。大手口西の「下がり土塁」の奥に平地が二段あり、土塁の反対側には「堀」が土地を区切っている。

この土地と「Y-6」の間には「目隠し土塁」が築かれており、「水場」には、この場所から直接使う事ができる構成である。

西側には「勝手口」の細い通路があり、下の土地に続いている。

そして西側は 急な崖で「要衝の地」である。

城山草千磨播



宇野氏の研究（2）

本当に宇野政頼は「下総守」だったのか

1、地元や今までの文献解説において「宇野政頼・下総守」とされている。
しかし 明確にその「官名」を記した文書をみていない。
宇野氏にとって「総領家当主の官名」は、「越前守」「備前守」と認識している。
「下総守」もそうであるが、当主の兄弟であると考えている。
『建内記』嘉吉元年9月28日の条に、宇野次郎満貫、西八郡守護代とあるが、それまでは「宇野越前守」であった。
応仁から文明6年までは「宇野越前守則尚」であり、宇野則尚の嫡子は「宇野備前守則清」で、後に「式部太輔」になる人物である。
宇野則清の舍弟が、文明年間後半の「宇野越前守某・人名不肖」で法名「嘉順」であろう。この人物は 赤松政則から重視されていたが永正年間頃に逝去了。
宇野則清の嫡子が「宇野越前守村頼」である。
宇野村頼の嫡子が「宇野政頼」であるが、政頼は、弘治年間に文書発給をしているが、永禄6年まで宇野村頼が越前守を名乗っていた為「藏人」のである。
天正元年、嫡子の宇野満景が「藏人」を名乗っている。
この時 宇野政頼は「越前守」を名乗ったと考えているが確証はない。
『言継卿記』永禄10年10月15日の条、手日記に「播州下揖保領家方之事、近年宇野越前守舍弟押領之事」とあり、越前守の存在が窺える。
この場所は、かつて以前にも「宇野式部太輔則清」が押領した場所であった。
2、宇野清祐は、政頼の次男ではないのではないか。
『信長公記』4月24日の条に 宇野民部楯篭、親伯父構とある。
宇野下野、居城へ取懸。
これらは「羽柴秀吉文書」を参考にしているものと考えられるが、一度検討する必要があるのではないだろうか。
龍野、赤松家の「広貞」「広英」は弥三郎を名乗り、下野守ではない。
この時期、赤松下野守宛の文書があるが断定はできない。従って下野を単純に「下総」の間違いとしてはならないと考える。
これらからすると、図示すれば次の様になる。

越前守 越前守
宇野村頼 ————— 政頼 ————— 満景

下野守 民部太輔
某 清祐

天正2年のクーデターで「宇野政頼」が出家したと考える。

十地坊過去帖で、千種で自害した人物を「宇野下総入道祐政」としている。

3、長水山城が本城ではなく、軍事的な城である。

宇野氏の居城は「篠の丸城」であり、当時、二つの城が機能していた。

宇野氏は 赤松前半期において西八郡の守護代であり、大きな政治的な権力と経済力を有していた、しかし その「守護代館」は明確になっていない。

それどころか政治的に必要な「政庁」も定かでなく、本拠地が「長水城」であるとの事であり、「篠の丸城」が出城であるかの様に言われている。

これは近世において「長水軍記」などの記録を基にしたためであろう。

この地域の「地域支配力」をみれば、明らかに二つの城が機能していた。

4、「守護代館」を探す。

以前にもこの事柄について検討を試みた。

その時の結果は「山崎町千本屋の場所」と考えたが確証がなかった。

その他に「近世山崎城」の場所、現在の山崎小学校かとも思う。この場所は、前記の「伯父の構」と考えられ、『陰涼軒日録』長亨2年8月5日の条、播州に侵入していた山名軍が撤退する際に、去月19日大河内討捕 首10、同20日広瀬城討捕分5・・とある。また 天文年間、尼子氏もここに駐屯していたとする。いずれにしてもこの場所は 要害の地である。

『建内記』嘉吉元年10月28日の条に「前守護代居所」と「宇野館」の記事があり、別に存在したように思われる。



図 版

千種町に関係する文書が有りましたので掲載致します。



「千草鉄」の預かり文書（石原文書）



城跡にある神社（参道）



堀切

平成22年4月10日発行
調査報告書 第10号

千草山城

北播磨城郭研究会
西脇市板波町245番地

藤原孝三方

TEL (0795) 23-5653